

## 言語分析の対象拡大に向けて

児 玉 徳 美

### 1 はじめに

今日、生成文法は言語分析において自然科学をモデルとし、理想化・モジュール化・還元化を進め、ますます抽象度の高いものになっている。この方法によってはじめて言語の本質に迫ることができると考えているためであるが、結果的には現実の場面の中で脈動する言語の実態から遠ざかり、必ずしも言語の全体像に接近しているわけではない。こうした傾向への不安はすでに1960年代から現れている。

- (1) 現代言語理論がいかに抽象的または「形式的」であろうとも、しよせんは、人々が実際に言語をどのように用いているかを説明するために発達してきた。言語理論は経験的証拠から生まれ、経験的証拠によってその真偽が証明される。
- (2) 今日、特定の形式主義理論に固執する言語記述は言語に存在するものをほとんど記述しない。...今や伝統的な形式ばらない(informal)記述に戻るべきである。

(1)はLyons(1968:51)によるもので現実面での言語の動態へ注意を喚起している。(2)はLakoff(1974:153)によるもので分析対象の拡大を訴えている。

言語使用者は常にコンテキストの中で活動しており、言語表現は常にコンテキストに依存して発せられている。蒸留水のような「中立」のコンテキストというものは本来存在しないはずであり、言語表現がどのようなコンテキストの中で用いられるかを説明しない理論は不毛である。本稿の目的はコンテキストを考慮しながら分析対象を拡大しようとするものである。そこでは言語能力と言語運用の区別を見直し、文を越える領域あるいはコンテキストの中味をどのように扱うかが問題になり、さらに意味を生成・理解するための言語理論の枠組みが問われてくる。

## 2. 言語能力と言語運用

言語学の分析対象はSaussureがラング, Chomskyが言語能力であるとした。いずれもコンテキストから独立したものであり, コンテキスト依存のパロールや言語運用は言語学の対象から排除されていった。コンテキストには誰が誰にどのように話し書いているかなどの場面状況や言語使用者の共有知識・信念などが含まれる。言語運用やパロールが依存しているコンテキスト情報は雑多で不純な外的要素であり, 科学としての対象になりえないとみなされている。しかし言語能力と言語運用の区別には大きく2つの問題がある。1つはその区別に妥当性があるか否かの問題であり, あと1つは区別された両者がどのように関連づけられるのかという問題である。

まず第1の問題からみてみよう。言語能力と言語運用の間には必ずしも明確な境界が引けるわけではない。両者を内在化された言語(I言語)と外在化された言語(E言語), コード(code)と行動(behavior), タイプ(type)とトークン(token), 理想(ideal)と実際(practice)と呼ぶ場合も同様である。コンテキストから独立した言語知識とコンテキストを構成する言語使用者や世界にかかわる言語外的知識は明確に区別できず, 両者は一体のものとして認知過程や知識体系に組み込まれているためである。

- (3) a. rabbit vs bunny, dog vs doggie
  - b. くださる vs くれる, される vs する
  - c. わたし vs ぼく, あなた vs きみ
  - d. 美しい vs きれいな, だが vs でも
- (4) a ??Tarzan is a bachelor .
  - b ??The Pope is a bachelor .
- (5) a . Our store sells alligator shoes.
  - b . Our store sells horse shoes.
- (6) Sunrise is at 6:40 a.m. today.

(3 a)の対の后者は幼児語であり, コンテキストでの言語使用者と関係する。語彙習得において(3 a)の対は単なる同義語でなく, 誰が誰に向かって使うべきかのコンテキストも含めて習得されている(Levinson1983:8参照)。同じことは(3 b)の敬語, (3 c)の自称詞と対称詞, (3 d)のスピーチレベルの異なる同義語にもいえる。ここでは語彙の意味がコンテキスト情報と不可分に結合している。(4 a, b)のbachelorは意味素性で単純に「未婚の男性」に還元されるものではない。結婚適齢期で結婚の意志をもつか否かななどの社会的結婚制度ともからみ, 適格

性については人により判断が揺れている。(5 a)ではワニが靴をはかないことを知っているため下線部を shoes for alligators の意味でなく「ワニ皮の靴」と解釈し,(5 b)では「馬皮の靴」というより shoes for horses と解釈する。Bolinger(1963)が指摘するように、この解釈には意味を明確にするために百科事典的知識が関与している。(6)において地球の自転が科学的に証明されたからといって sunrise (日の出) がまちがった表現とみなされるわけでもない (Jackendoff 1992:170 参照)。ここで重要なのは現実世界についての科学的事実ではなく、現実が人間にどのように認知されるかという点にある。

次文は同じ文があいまいであったり、ほぼ同じ意味が異なる形で表されたものである。

(7) John's friends asked their wives to visit one another.

a . ジョンの友人たちはそれぞれの妻に友人たちの妻とお互いに行き来するよう頼んだ。

b . ジョンの友人たちはそれぞれ妻に自分の他の妻ともお互いに行き来するよう頼んだ。

(8) a . Columbus believed that the world is round.

b . Columbus believed that the world was round.

(7)の英語は(a)(b)の両方の意味をもち、一夫一婦制社会か一夫多婦制社会かによってその解釈が異なる。(8 a, b)はほぼ同じ意味であるが話し手が被伝達部の内容を真であると信じているか、真偽について何も言っていないかの違いであり、信念の違いが形式に反映している。言語能力はコンテキストと無関係に意味や形式について習得される知識であり、(7)(8)においてそれぞれ2通りの解釈や表現形式が存在することが意味論や統語論で規定されるにしても、その際意味や形式の違いが恣意的なものであるということにはならない。英語の構造パターンとしてなんらかの形で社会的事実や信念に言及せざるをえない。他方、言語運用は言語能力が教えてくれる2通りの選択肢のうち1つの解釈や表現形式がコンテキストに基づいて選ばれたものであるにすぎない。言語能力と言語運用の間に本来それほど大きな隔たりはない。

次に第2の問題に移る。Chomsky(1965:9)は言語能力と言語運用を区別したあと両者の関係について次のように述べている。

(9) きっと、言語使用のしかるべきモデルは、話し手・聞き手もっている言語知識を表す生成文法をその基本的モデルとして組み込むであろう。しかし、この生成文法は、それ自体では知覚モデルや発話モデルの特質や機能を規定するものではない。

Chomsky(1965)は言語能力を対象とする文法のモデルと言語運用のモデルが合致しないとし、それ以後両モデルの関連づけを試みてもない。両モデルが合致しないというChomskyの悲観的主張は、残念ながらその後の言語心理学の実験によっても立証されている（詳しくは児玉1987:83参照）。

第2の問題は第1の問題とも関連している。言語能力と言語運用は本来明確に区別できない部分を有しているが、両者を完全な対立概念として捉えたために、結果的に両者を調整できなくなっている。言語能力と言語運用は対立する側面をもつとともに、相補的な関係にであったり、両者の区別が困難であったりする。こうした現実を無視して言語能力のみを対象とし、言語運用を排除した結果、生成文法の対象とする領域がますます狭いものになっていった。(1)(2)もこうした状況に対する批判とみなされる。

抽象化された言語能力の統語論モデルへの不満は、Jackendoff(1988)も認めているように、むしろ隣接分野で大きい。例えば心理学、人工知能、認知科学では1語1語をどのように処理するかという言語運用とも関連する心的過程に関心があるが、その点が生成文法でほとんど考察されていないことが不満の原因になっている。Chomskyはしばしば「心理的实在」というが、Chomsky自身これまでその実体を探ろうとしたことはない(児玉1987:132参照)。「心理的实在」をもつ実体は本来意味に関連し、1語1語を生成・理解する際の心的過程に大きい影響をもつはずである。生成文法がその後言語能力と言語運用の関連づけや統語論と意味論の関連づけを試みないのは、単にその時期を延ばしているというより、言語運用や意味に関与する要因が生成文法理論の範囲を越えるためそれらを排除しているというほうが正確である。言語理論としては言語能力的なものや言語運用的なもの、統語法や意味の両方が構成する言語的現実を記述すべきである。

本節の標題も言語を二分法で捉えている。言語能力と言語運用のいずれに加担するかによって、言語を構成する要素や分析法がしばしば次の二分法で区別される。

- (10) a . 言語知識と言語外知識
- b . 辞書の意味と百科事典の意味
- c . 形式主義と機能主義
- d . 意味論と語用論
- e . 構文論と語彙論

二分法は両極の主張を戦わすことで重要な論点が浮き彫りになるという利点がある。しかしそれは議論の方法として何が有用であるかの問題にすぎない。言語の真実はいずれか一方にあるというより、むしろ両者の中間に、あるいは両者の合体したところにある。ここには二分法そ

のものの限界があり，落とし穴がある。

### 3．文を越える領域

これまで言語理論は文を最大の単位としてきた。言語の全体像に迫るためには文を越えるテキストをも対象にする必要がある。テキストも文が積み重なった側面を有し，その限りでは文文法の分析装置を利用できる。しかしテキスト文法は文文法の文法範疇と違って文を基本単位として談話の基本範疇を設定する必要がある（Mey1993〔澤田・高司訳〕210参照）。そこでは文学・会話・手紙・掲示などの談話の使用域，文の統語特徴と関係なく文が表す陳述・約束・疑問・命令などの発話行為の種類あるいは話し手の意図などが記述されることになる。

テキスト文法での最大の課題は文と文のつながりをどのように説明するかにある。文と文の結合は統語論の情報を利用した構造的つながりである結束性(cohesion)と意味的つながりである一貫性(coherence)によって説明される。まず前者からみてみよう。

Halliday-Hasan(1976)は英語のテキストを対象に結束性の手段として同一物指示・代用・省略・接続・語彙結束をあげ，それぞれがいかにかテキストをまとめているかを説明している。はじめて本格的に文間の統語的特徴を記述した功績があるが，Halliday-Hasanのいう結束性は文間のつながりを必ずしも十分に説明するものではない。

- (11) a . The following days were unlike any that had gone before. There wasn't a man on the ranch who didn't know of Saturday's race and the conditions under which it would be run. They gave any excuses to get near the black stallion's corral.
- b . \*The sun climbed higher, and with its ascent the desert changed. There was nothing Lucy liked so much as the smell and feel of fur. One evening, after dark, she crept away and tried to open the first gate, but swing and tug as she might she could not budge the pin.

上例はGreen(1996:105)による。(11 a, b)はそれぞれ3つの文からなり，ある場所のある時について語ったものと考えられる。最初の文と2番目の文には何の結束性もなく，それぞれの文には他の文の語彙項目と関連する語彙結束もない。3番目の文では主語の代名詞が2番目の文と関連している。(11 a, b)は結束性に関する限り，構造上類似のふるまいをしているが，両者の文間に存在する意味上のつながりの違いは説明できない。(11 a)の最初の文はその後の数日が特別な日であるという。そのことは2・3番目の文において牧場の男たちが次の土曜日に開催される競馬を待ちわびている姿からうかがえる。これに対して(11 b)は3つの無関係なテク

ストから選ばれた3つの文が(11 a)の統語上の結束性に対応するように並べられたにすぎず、文間に意味上のつながりはなく、意味不明の発話である。

次は日本語の例である。

- (12) a . 尾形信吾は少し眉を寄せ、少し口をあけて、なにか考えている風だった。他人には、考えていると見えないかもしれない。悲しんでいるように見える。
- b . 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

(12 a, b)はそれぞれ川端康成の『山の音』と『雪国』の冒頭にある3つの文である。(12 a)では同一または関連する語句の反復が3つの文に用いられ、2・3番目の文の主語が省略されており、結束性がテキストのまとまりを強化している。日本語における主語の省略は、英語なら代名詞になるところであるが、いずれも文間の統語的つながりを示す点は変りがない。しかし(12 b)では最初の文の「抜ける」の主語がない。これは省略というより「欠落」と呼ぶほうが妥当であろう。日本語としては「トンネルの向う側は雪国であった」に近く、主語を探すこと自体が原文の意をそこなうことになる。そのように考えると、(12 b)の3つの文には5種の結束性がほとんど働いていない。わずかに語彙結束の関連語句が最初と2番目の文で「雪」「白く」と並んでいるにすぎないが、(12 b)は適格である。結束性が乏しいとはいえ、2番目の文はそれだけ取り出した場合、意味不明の文となる。最初の文に続くことにより意味が成り立ち、トンネルを抜けると暗い夜空のもと地面が雪で白くおおわれていたと推論される。

(11)(12)の適格性を判断する際、統語上の結束性は文間のつながりにとって必要条件であったり、無関係であったりする。その点、結束性は意味上の一貫性を部分的に支えるものにすぎない。テキストの統語特質はすでに文法で用意されているものに基づいて説明することができる。テキストの適格性を説明するためには意味上の一貫性の分析方法を確立することが不可欠である。言語はしょせん人間の生得的な認知能力や時空上共通の環境で用いられるものであり、文法に普遍性があるのと同じようにテキスト文法にも普遍性があるはずである。(12 b)の読者が同じ推論を働かせて共通の理解を得るということは、テキストやコンテキストの解釈においても普遍性が働いている証拠である。意味上の一貫性については次節以降でも考察する。

#### 4 . 意味の領域

かつて一般意味論が言語による人間相互間の誤解や摩擦を避けるため、「地図は現地ではな

い」と警告し、言語の適切・正確な使用を訴えた。確かに記号としての言語は世界を描くが、一種の地図であり現実の世界そのものではない。地図と同じように、言語はできるだけ正確に世界の出来事を描こうとしており、言語表現のモデルは世界の出来事であるといえる。

現実世界の出来事が言語表現のモデルであるとすれば、出来事についての知識をどのように蓄積しているかが問題となる。人間は現実世界での過去の経験に基づいて知識を組織化し、構造化している。知識の範囲は範疇相互の関係、出来事の連鎖、好悪や価値の基準、推論の方法など多方面にわたる。知識を構造化する単位は知識の獲得方法や範囲によってフレーム(frame)・スキーマ(schema)・スクリプト(script)と細かく区別する者もあるが、その境界は必ずしも明確でなく、ここでは一括してフレームと呼ぶ。例えば「自動車」という語のフレームには箱型のもの・運転手・エンジン・燃料・運搬・車輪など、自動車に関連する一連の概念が含まれ、「売買」という出来事には売り手・買い手・商品・現金という概念が喚起される。その結果、次のような表現形式が生まれる。

(13) a . He has a sports car. The body is red and the seats are black.

彼はスポーツカーをもっている。車体は赤で座席は黒だ。

b . He decided to sell a horse and buy a car with the money.

彼は馬を売り、その金で車を買うことになった。

(13 a, b) の下線部は初出の名詞句であるが、まるで既知情報であるかのように、the や「は」「その」がついている。これはその名詞句が「自動車」「売買」のフレームに含まれるためである。

知識は多様なフレームの集合体である。このフレームにより知識が構造化されていればこそ、人間は新たに生じる状況に対して適切に理解し、対応することが可能になる。フレームはテキストを理解する際に働く推論の基礎をも提供している。Grice(1975)の「協調の原則」(および4つの公理)と Sperber-Wilson(1986)の「関連性の原則」はお互いに折り合いが悪い印象を与えているが、いずれもテキストを手掛かりにそれぞれの一般的な解釈原則と具体的なコンテキスト情報の両面から推論をひき出そうとしている点は共通している。両者ともことばによるコミュニケーションにはフレームを軸にした人間に共通の知識体系が関与していることを前提にしている。

人間はコミュニケーションにおいて発話をあいまいなままで残すことを嫌い、知識体系や認知体系に基づき発話をできるだけ1つの意味に解釈しようとする。

(14) A : Are you going to the talk this afternoon ?

(今日の午後、講演に出るの?)

B: It's on phonetics.

(音声学の話だからね)

(15) A: What time is it?

(今何時?)

B: The bus just went by.

(バスがちょうど通ったよ)

(14)はBlakemore(1987:26), (15)はMey(1993(澤田・高司訳)56)による。いずれもA・Bの共有知識を前提にしている。(14)でBの発言自体は「音声学に興味があるので出る」「音声学に興味がないので出ない」かの意味であいまいであるが、A・Bは2人の共有知識に基づきいずれか一方の意味に解釈している。2人は共有知識をいちいち確認しているわけではなく、相手も自分と同じ知識を共有していると想定している。したがって思い違いもあり、(14)においてA・Bがときに別の結論をもつ場合もありうる。(15)のBは、Aの質問に直接答えず、一見無関係なことを話しているかにみえるが、バスがいつも午前7時45分に通ることを共有知識としてもっている場合、会話として成立する。ここでは言語表現として存在しないコンテキスト情報を既定値(default)として補うことで談話が成立している。(14)(15)においては多様な情報の中から重要な情報を選択して1つの意味に解釈しており、その推論過程では因果関係が中心的な役割をはたしている(関連性と一貫性の関係についてはBlakemore1987:105-44参照)。

現実世界での経験を介して同じ知識をもつことにより同じフレームを選ぶことになる。しかしこのフレームは絶対固定的なものではなく、必ずしも常に一様に働くとは限らない。場合によっては意識的にフレームを破棄する発話を行う。例えば皮肉や冗談はコンテキストを無視して一見Grice(1975)の「質の公理」に違反しているかにみえる。しかしその場合でも通例聞き手は表面的な発話と異なる話し手の真意を理解し、話し手が「質の公理」を守っていることを前提に皮肉や冗談を文字通りと異なる意味に再解釈する。ときにコンテキスト・協調の原則(および4つの公理)・具体的なテキストのバランスがくずれるが、その場合、聞き手は皮肉や冗談を文字通りの意味に解釈し、協調の原則を守らない話し手に立腹することになる。

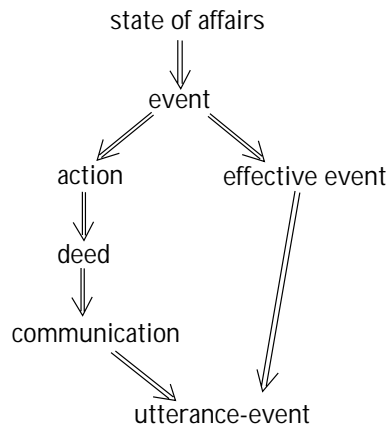
知識を体系づけているフレームと現実と接する事例の関係は認知構造や言語構造を支配している「特質継承の原則」におけるモデルMとその事例Iの関係に対応する。特質継承の原則とは既定値原則(default principle)とも呼ばれ、ある事例IがモデルMに属するとみなされるやいなや、例外的な情報を除いてその事例はそのモデルのすべての特質を有するとみなし、M Iと表記する(詳しくはHudson1984:16-9;1990:30-52;児玉1999参照)。この原則は、日常生活で実際に接する外界の事象に対して、実際の経験によって得る情報よりはるかに多くの間接的情



報をわれわれに提供している。例えばAがモデルBの事例であり、さらにBがモデルCの事例でもあると知ることにより、われわれはAがモデルCの事例でもあるという一連の推論を行っている。もちろん推論によりまちがった間接的情報をえることもある。AやBを正確に把握しないまま、安易にCのステレオタイプをつくったり、Cへの偏見をそのままAやBに適用したりする場合である。(13 a, b)で初出の名詞が既知情報であるかのように扱われたり、フレームに基づいて新しい状況に適切に対応できるのもこの原則に由来する。

一般性の高いものが一般性の低いもののモデルとして働くと考えた場合、多様なフレームに関する発話(utterance-event)は何をモデルにするかが問題となる。心的実体の階層を表示したHudson(1984:243)に従うと発話のモデル網は次のように図示される。

(16)



上の図からうかがえるように、発話は出来事(event)の一種であり、さらには非言語世界の行動・行為・コミュニケーション・効果を狙う出来事などをモデルにしている。その結果、発話される語・動詞・語彙項目などの言語知識だけでなく知識一般を構成するフレームにも場所・時間・行為者・受け手・目標・意図・信念などの特質が現れる。このような特質は発話のモデルである行為やコミュニケーションなどから継承されているためである。本節の冒頭で述べたように現実世界の出来事が言語表現のモデルであり、言語外世界の知識を体系化するフレームがコンテキスト情報として言語表現に関与するのも上図のモデル網から説明される。

言語を含む知識一般が普遍的な生得能力を基礎に現実世界での経験を介して形成されるフレームによって体系づけられている。同じ共同体においても知識として共有されているものと共有されないものがあるように、文法やテキスト文法が対象とする言語の意味にも共同体の成員に共通な既成のコードと成員間で異なるコードがあると想定される。両者の境界は必ずしも明確でないが、一般に前者の場合、言語に付与されている意味を機械的に習得し、後者の場合、他者と異なる新しい意味を言語に付与することになる。言語表現の適格性判断が多くの場合一

致するのは前者のコードによるためであり、ときに判断が異なるのは後者のコードによるためである。適格性判断にくい違いが生じるのは少ないとはいえ、後者のコードが存在することによりコンテキストやフレームの解釈に柔軟性が生まれ、新しい意味だけでなく新しい価値観が生成され言語変化が誘導される。

要するに人間が語る時、話し手は自分のフレームを含むコンテキスト情報と伝達意図をテキストに埋め込んでいる。したがって意味上一貫性のあるテキストとは聞き手が話し手のコンテキスト情報と伝達意図を正確に再現できるようなテキストとなる。その点、一貫性のあるテキストは話し手と聞き手の共同作業のうえに成立するものである。

## 5. 今後の課題

これまで述べたように、分析対象を拡大した場合、文法の枠組をどのようにするのかという問題がある。今その全体像が明確なわけではなく、ここではその大枠を示すにとどめる。

(i)言語は言語固有の特質とともに認知体系や知識体系と共通の特質をもつ。(ii)言語が認知体系や知識体系に由来する特質をもつとすれば、対象とする言語が文であれテキストであれ、言語運用・コンテキスト情報などをも含めてできるでけ同じ装置で説明されるのが望ましい。(iii)言語表現は常にコンテキストの中で発せられるだけに、「文」「テキスト」は分析の際人為的にコンテキストから切り離されたものである。そこで文文法やテキスト文法は厳密にはコンテキストよりむしろ言語表現を重視するものである。他方、言語表現そのものの分析というより、言語表現とそれが発せられるコンテキストともども分析の対象にすることもできる。これは談話文法または談話分析と呼ぶのがふさわしい。(iv)意味は形式に対して解釈的なものというより、(11)(12)でみたように、むしろ形式を先導するものである。(v)意味は(16)のモデル網より体系づけられる認知能力や知識に基づいて形成され、言語構造に投影される。

上記の大枠との関係で次の2点に注意する必要がある。第1は方法論に、第2は意味にかかっているものである。まず第1の点からみてみよう。上記の(ii)(iii)でみたように、言語表現は認知、知識、コンテキストなどと渾然一体となって発せられる。そこで多様な要素が結合している現実を理解するためには、各要素の本質を知ることが何よりも重要であり、そのあとに各要素の結合している実態を明らかにすることになる。しかし場合によっては各要素は現実から切り離されると固有の特質を表さなくなる。この場合、各要素の結合している現実そのもののほうが重要になる。現象によってモジュール化や還元化がうまく機能するものとしめないものがあり、先験的にいずれか一方を採るべきということにはならない。文文法やテキスト文法の言語分析は前者の立場である。言語そのものの構造が中心課題であり、認知、知識、コンテキストなどへも言及していくが、それぞれの本質そのものを研究するわけではない。他方、談話文法や談

話分析は後者の立場である。言語そのものの本質を探るといふより、言語表現は認知・知識などを含むコンテキストの中で、さらにはそれを囲む時代や社会の中で発せられており、そのような諸要素と言語表現の関連を分析しようとするものであり、当然学際的になってくる。2つの立場の違いは焦点をどこに当てるかの違いにある。両者の間は連続体をなしており、言語にかかわる分析が多様に分かれる理由もここにある。

注意すべき第2点は上記の(iv)(v)と関連し、テキストやコンテキスト情報などに含まれる意味をどのように掘り起こしていくかということである。その過程で意味論と語用論をどのように区分するかが問われるかもしれない。しかしその際、意味論は言語能力を、語用論はコンテキストを含む言語運用を対象にすると規定することは、§2でみたように、言語能力と言語運用の区分自体があいまいなため、あまり生産的でない。そうかといって分析対象を拡大することにより分析される意味が個々バラバラに断片的なものになることも生産的でない。意味論と語用論を分離することより、むしろ両者を含む包括的な理論や方法こそが要請される。文からテキストに至る言語活動を対象とする分析には新たに次のような課題が生まれてくる。

第1は長期記憶され、語彙部門で扱われる語彙項目の意味・統語法と、長期記憶されず、テキストにより臨時的に付与される意味・統語法の違いを明らかにすることである（両者の違いについては児玉1998:80-2;1999参照）。例えばPlatoは同一文中において哲学者「プラトン」の意味にも「プラトンが書いた本」の意味にもなるが、sandwichは通例食べ物としての「サンドウィッチ」を意味し「サンドウィッチを食べた人」の意味はコンテキストとの関係でその使用に限られる。また、I hope the eighth of May. はthe eighth of Mayを副詞語句・名詞語句のいずれに解釈しても、動詞hopeとの結合が語彙部門で扱われるhopeの語彙情報に含まれないため、談話の最初に現れる場合、通例不適格である。しかしWhen is she coming?などの前言を受けた答えとしては適格である。I hope she is coming the eighth of May. と解釈されるためである。Grice(1975)やSperber-Wilson(1986)はコミュニケーションにおいて推論が働く一般的な解釈原則を提示しているが、このような具体的な言語表現の適否について判定を下すことができない。これはGrice(1975)やSperber-Wilson(1986)がその標題からうかがえるように(16)のモデル網のうちcommunicationの一般原則の提示にとどまっているためである。確かに言語は思考やコミュニケーションのために用いられ、推論は思考やコミュニケーションにおける同じく言語表現においても働いている。しかし言語表現の構造は思考やコミュニケーションの特質を部分的に共有しているだけでなく、固有の体系も有している。言語理論として具体的な言語表現の適否を判定するためには(16)のモデル網のうちutterance-eventにおいて語彙部門の情報と臨時的な用法との区別をする必要がある。長期記憶されている語彙情報とコンテキストとの関連で臨時的に用いられるものの意味・統語上の違いには諸言語において多くの共通性がある。コンテキストに応じて意味や統語法が無限に拡大されるわけではない。長期記憶される語彙情報

がどのような原理の下で蓄積され、コンテキストによる臨時的な意味用法がどのような原理の下で拡大されるのかについてはさらに詳しく考察する必要がある。そのことによってコンテキストの役割も明らかになってくる。

第2の課題は対象とする言語の意味そのものを拡大することである。上記の(v)が示唆しているように、習得される意味は(16)のようなモデル網を介して階層化されている。各範疇やフレームを含む知識一般が階層化され、言語に投影されているとすれば、対象とすべき言語の意味は従来より広がってくる。言語分析ではこれまで字義通りの意味のほかに言語の意味として含意(connotation)や推意(implicature)が考察されてきた。しかし言語発信者が(16)のモデル網のうち deed, communication, effective event などのいずれを重視するかにより、あるいはコンテキスト情報のうち何に焦点を当てるかにより、表現内容も違ってくる。テキストにおいては何を表現し何を表現しないかの選択問題が出てくる。この場合、表現に埋め込まれている含意や推意だけでなく、ときには表現されていないものとも関連し、発信者の意図や価値観をも明らかにする必要がある。

第3に、テキストに意味上の一貫性をもたらすものが何であるかを明らかにすることである。そのためには、意味に関与する上記でみた多様な要因を統合する原理を探る必要がある。ここでは意味上の一貫性がどこに働いているかが問題となる。一貫性の分析対象としては、当面、語を基本単位とする文の依存関係および文を基本単位とするテキストの依存関係が考えられる(テキストの依存関係については児玉 1998:87-90 参照; Schilperoord-Verhagen 1998 も談話の基本単位として節を中心に依存関係を設定している)。依存関係は意味と統語法の結節点をなすためである。

テキスト文法であれ、談話文法であれ、テキストを対象とする分析は(16)からうかがえるように、コミュニケーション理論の一部でもある。21世紀に向けてインターネットを含むマスメディアは大きく変わろうとしている。言語やメディアはコミュニケーションの単なる道具ではない。むしろ伝えられるメッセージの内容に何らかの影響を与えている。つまり世界の認識が言語やメディアを必ず伴ない、それを媒介としている以上、認識や表現のあり方が言語やメディアに由来する何らかの制約を受けている。テキストを対象とする分析がテキスト・コンテキスト情報・言語使用者の意図などの諸関係をつなぐ原理を提出したとき、その分析は意味伝達のしくみだけでなく、情報化時代に要請されるメディアリテラシーにも寄与することになる。

#### 引用文献

- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Basil Blackwell.  
Bolinger, D.L. 1965. 'The atomization of meaning.' *Language* 41,555-73.

- Chomsky, N. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Mouton.
- Green, G.M. 1996. *Pragmatics and Natural Language Understanding*(2nd edition). Lawrence Erlbaum Associates.
- Grice, H.P. 1975. 'Logic and conversation.' In P.Cole and J.L.Morgan(eds.) *Syntax and Semantics 3 :Speech Act*, 41-58. Academic Press.
- Halliday, M.A.K and R.Hasan. 1976. *Cohesion in English*. Longman.
- Hudson, R. 1984. *Word Grammar*. Basil Blackwell.
- . 1990. *English Word Grammar*. Basil Blackwell.
- Jackendoff, R. 1988. 'Topic . . . Comment: Why are they saying these things about us ?' *Natural Language and Linguistic Theory* 6:435-42.
- . 1992. *Languages of the Mind : Essays on Mental Representation*. MIT Press.
- 児玉徳美. 1987. 『依存文法の研究』 研究社出版 .
- . 1998. 『言語理論と言語論 - ことばに埋め込まれているもの - 』くろしお出版 .
- . 1999. 「1語は文中でなん役演じることができるか」『立命館文学』 561:39-78.
- Lakoff, G. 1974. Interview in H.Parret(1974) *Discussing Language*. Mouton.
- Levinson, S.T. 1983. *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Lyons, J. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge University Press.
- Mey, J.L. 1993. *Pragmatics : An Introduction*. Blackwell. ( 澤田治美・高司正夫訳 ; 1996 『ことばは世界とどうかかわるか』 ひつじ書房 )
- Schilproord, J. and A. Verhagen. 1998. 'Conceptual dependency and the clausal structure of discourse.' In J.-P. Koenig (ed.) *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*, 141-63. CSLI Publications.
- Sperber, D. and D.Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Basil Blackwell.

( Tokumi Kodama, 本学文学部教授 )